

平田遺跡

宮崎広域都市計画事業東宮土地区画整理
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書

1996
宮崎市教育委員会



平田遺跡全景

序

近年、土地区画整理に伴う宅地造成工事や農業基盤整備事業、リゾート開発により年々発掘調査が増加しているところであり、それに伴って宮崎市内の原始から近世の歴史も徐々にではありますが、解明されてきております。

本書は宮崎広域都市計画事業東宮土地区画整理事業に伴い発掘調査いたしました平田遺跡の調査報告書であります。今回の調査では弥生時代から江戸時代の土器をはじめとして数多くの遺物が出土し、溝状遺構や杭列などの遺構も検出され、これまで確認されていなかった郡司分地区における原始から近世にかけての歴史を解明するのに役立つものと考えられます。今後、本報告書が学術・研究の一助となり、広くご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査にご協力いただきました関係機関、地元の方々、作業員の皆様に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

宮崎市教育委員会
教育長 稲倉宗知

例　　言

1. 本書は宮崎広域都市計画事業東宮土地区画整理事業にかかる宅地造成工事に伴い、平成7年4月27日～平成7年8月7日に実施した平田遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査組織

調査主体	宮崎市教育委員会				
調査総括	文化振興課	係長	井手上	仁	悟
調査庶務	タ	主事	岩城	勝	志
調査員	タ	タ	中山	豪	
	タ	主事補	時任	直	也
補助員	タ	嘱託	椎	由美子	
	タ	タ	久富	なをみ	
	タ	タ	松永	光	雄

3. 本書の執筆は中山、時任が行った。
4. 写真撮影は中山が行った。
5. 掲載図面の実測・製図・図版の作成は中山、椎、久富、松永が行った。
6. 本書の編集は中山、久富が行った。
7. 本遺跡出土遺物は宮崎市教育委員会で保管している。

本文目次

I.はじめに	1
1. 遺跡の立地と環境	1
2. 調査に至る経緯	4
II.調査の記録	7
1. 調査の概要	7
2. A区の調査	7
1) 遺構について	7
2) 遺物について	7
3. B区の調査	8
1) 遺構について	8
2) 遺物について	8
4. C区の調査	10
1) 土層について	10
2) 遺構について	10
3) 遺物について	10
III.まとめ	16

挿図目次

第1図 遺跡周辺地図	3
第2図 調査区図	5
第3図 A区出土状況図	6
第4図 A区西壁セクション図	6
第5図 A区出土遺物実測図	7
第6図 B区出土状況図	8
第7図 B区出土遺物実測図	9
第8図 C区南壁セクション図	10
第9図 C区出土状況図	11
第10図 C区出土遺物実測図1	12
第11図 C区出土遺物実測図2	13
第12図 C区出土遺物実測図3	14

図版目次

図版1	A・B区全景	17
図版2	A区土器出土状況	18
図版3	A区溝状遺構	18
図版4	A区西壁セクション	18
図版5	調査風景	18
図版6	B区溝状遺構	19
図版7	B区土器出土状況	19
図版8	B区土器出土状況	19
図版9	B区鉄器出土状況	19
図版10	C区全景	20
図版11	C区遺物出土状況	21
図版12	C区土器出土状況	21
図版13	C区木器出土状況	21
図版14	C区南壁セクション	21
図版15	出土遺物	22

I. はじめに

1. 遺跡の立地と環境

平田遺跡は宮崎平野南部の低丘陵地帯の東辺部にあたる。この地域は、宮崎市大字本郷南方から宮崎市大字郡司分にまたがる一帯であり、宮崎郡清武町付近からつづく標高20~40m程度の舌状台地の先端部と独立丘陵に挟まれた部分に位置し、調査区付近では南北に谷が開析している。また台地周辺には入り組み谷が形成されている。

平田遺跡の北西約750mの所に、奈良時代の須恵器の窯跡として知られる松ヶ迫窯跡がある。

また平田遺跡を含む本郷南方地区一帯は、平安時代の寛喜年間には八条女院領國富荘に包含されていた。建久8年（1197）に書かれた『日向国図田帳』によると、國富荘は「一円荘」と「寄都」の2つに分かれていて、その2つを合わせた広さは1502町にも及ぶ大荘園であったという。ところが、南北朝時代末期になり、土持氏と伊東氏によって分割支配されたのをきっかけに、國富荘は崩壊の一途をたどることになる。

平田遺跡に隣接する郡司分地区的丘陵上より、平安時代末期のものと思われる銅鑄製積上式経筒が発見された。経筒は相輪形つまみのある笠蓋に、4段輪積の筒身と2段台底からなる重厚なものであった。積上式の経筒は九州独特のものといわれ、太宰府を中心に分布の集中する形態である。

平田遺跡の北方約500mの所に櫻田遺跡がある。この遺跡からは、溝状遺構が検出された。また平安時代の土師器や須恵器が出土している。

平田遺跡の北西約1.5kmの台地上に郡司分地区遺跡がある。ここからは、旧石器・縄文時代早期・弥生時代・古墳時代・平安時代の遺物、遺構が検出されている。

平田遺跡の西方約2kmの低丘陵上に縄文時代早期・前期・後期の土器が出上した若宮田遺跡がある。

また平田遺跡の西約3kmの所に、辻遺跡がある。この遺跡からは縄文時代早期の土器が出上している。遺構としては、集石遺構が検出されている。

平田遺跡の西側の県道城ヶ崎清武線沿いに、清武川を取水源とする松井用水路がある。この用水路は、寛永年間（1624~1643）に、松井五郎兵衛儀長によって創設された。清武川に井堰を設け、およそ11kmの用水路を開削。山脈肥藩清武郷の8ヵ村、およそ220haの天水田をうるおすものであった。現在では、松井用水路はその大部分がコンクリート舗装され、須田木丘などがわずかに当時の面影を残すのみである。

平田遺跡の南約2.5kmの所に宮崎学園都市遺跡群がある。この遺跡群内から検出された遺物、遺構は次のようになっている。

堂地東遺跡は先土器時代の剥片尖頭器・縄文時代早期の集石遺構5基・弥生時代中期の竪穴住居跡2軒・同後期の竪穴住居跡18軒・古代~中世の掘立柱建物跡10軒・中世の石塔39基・近世墓14基などが検出され、先土器時代から近世まで連綿として営まれた遺跡である。

前原北遺跡は、縄文時代早期の集石遺構や早期の土器、晩期後半の夜臼式土器、弥生時代中期後半から後期後半にかけての土器が出土している。

前原西遺跡では、先土器時代の細石刃・細石核や縄文時代早期の土器、弥生時代後期後半の土器、中世の須恵器・青磁・白磁などが出土している。また遺構としては縄文時代早期の集石遺構12基・弥生時代の竪穴住居跡3軒・中世の掘立柱建物跡、溝状遺構、周溝墓が検出されている。

平畠遺構では70軒にも及ぶ縄文時代住居跡・平安時代の竪穴住居及び掘立柱建物跡が検出されたほか、縄文時代後期後半からおおむね晩期前半にかけての土器、勾玉及び石刀、石鎌、石包丁、石錘などが出土している。

陣ノ内遺跡からは縄文時代早期の集石遺構14基・弥生時代中期の竪穴住居1軒・古墳時代前期の竪穴住居跡11軒・古墳時代後期の竪穴住居跡1軒・平安時代の竪穴住居10軒・中世の掘立柱建物10軒・土壙墓1基・土坑14基・溝12~13本など各時代の遺構が検出された。

前原南遺跡からは古墳時代前期の竪穴住居跡3軒・平安時代の竪穴住居跡2軒と掘立柱建物12軒・平安時代を中心とする土坑などの遺構が検出されたほか、壺・壺・高杯・器台・鉢などの土師器が出土している。

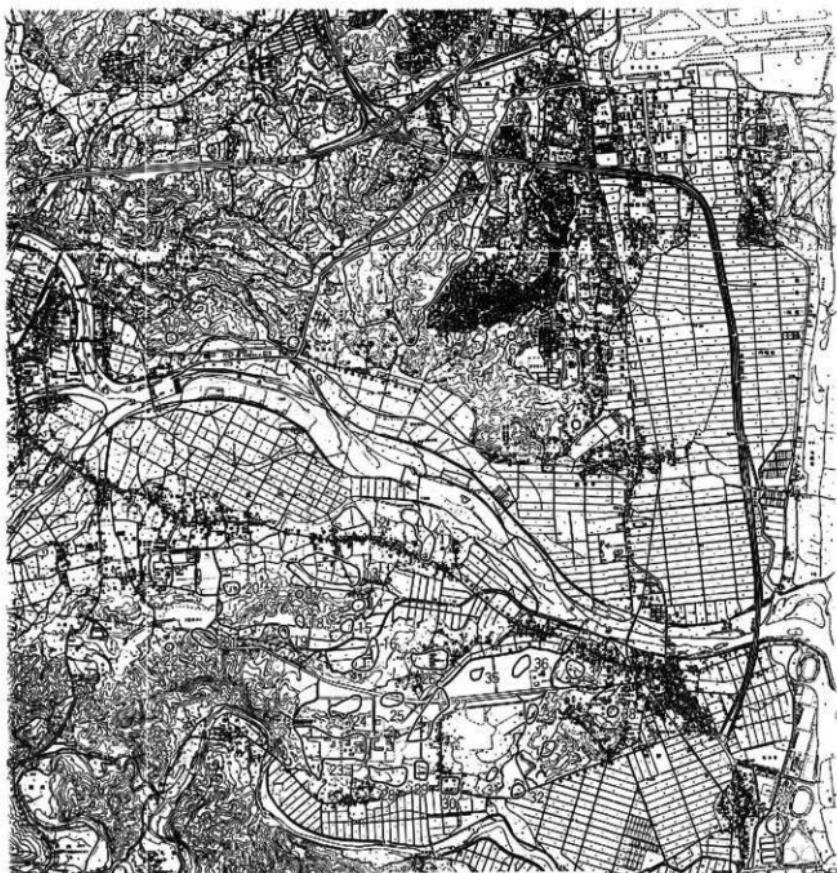
堂地西遺跡では、集石遺構6基と剣片尖頭器やナイフ形石器を中心とする先土器時代文化層、縄文時代草創期から早期の土器を伴う集石遺構13基などが検出されたほか、弥生時代後期の住居跡2軒や柱穴群なども検出された。

今江城からは、土壙16基・井戸1基・多数の柱穴などの遺構とともに土師器や青磁、備前焼などの陶磁器も出土した。この城の遺構は3つの郭とそれをとりまく堀・土塁が調査の結果、確認された。

車坂城からは、第一曲輪で柱穴群、土壙状遺構、溝状遺構、空堀・土塁が、第二曲輪で溝状遺構や空堀が検出されている。遺物としては、土師器の小皿・壺類の破片や輸入陶磁器、国産陶磁器、石鍋・古錢が出土している。

以上のように宮崎学園都市遺跡群の時代層は広範囲にわたっている。

平田遺跡の南西約1.5kmの所に木花古墳群がある。木花古墳群は前方後円墳2基と円墳1基が現存するのみであるが、前方後円墳の1号墳からは円筒埴輪片が表面採集されている。この埴輪片の発見により、1号墳は6世紀前半の築造と推定される。また2号墳からは、昭和4、5年頃に前方部と後円部の境の窪みの「石棺」から直刀が出土したと『木花郷土誌』に記載があるが、詳細に関しては不明である。



1. 平田遺跡
2. 純筒出土
3. 西田第一遺跡
4. 榎田遺跡
5. 西田第二遺跡
6. 松ヶ追窯
7. 郡司分地区遺跡
8. 松井用水路
9. 若宮田遺跡
10. 辻遺跡
11. 木花古墳群
12. 北ノ原遺跡
13. 下原遺跡
14. 小山尻東遺跡
15. 小田上遺跡
16. 西ノ原地区遺跡
17. 小山尻西石塔群
18. 浦田遺跡
19. 入料遺跡
20. 下田畠遺跡
21. 赤坂遺跡
22. 山内石塔群
23. 平畠遺跡
24. 堂西遺跡
25. 堂地遺跡
26. 西遺跡
27. 熊山遺跡
28. 大車陣遺跡
29. 馬場遺跡
30. 車陣遺跡
31. 陣料遺跡
32. 陣坂花原遺跡
33. 木前遺跡
34. 前遺跡
35. 前遺跡
36. 前遺跡
37. 今木遺跡
38. 本遺跡

0

1.5km

第1図 遺跡周辺地図

2. 調査に至る経緯

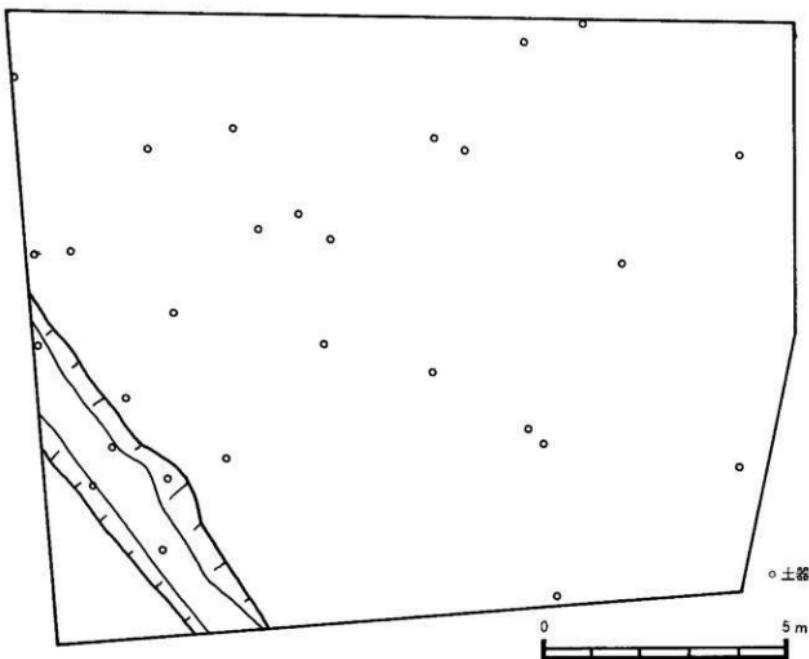
平成5年5月7日、東宮土地区画整理組合設立準備委員会、区画整理課等による、「東宮土地区画整理事業計画に関する調整会議」において、郡司分地区的東宮土地区画整理組合施行による土地区画整理事業の概要が明らかにされ、協議の結果、試掘調査が必要となった。

その後、協議を重ね、平成6年11月25日と平成7年3月9日の2回にわたって試掘調査を実施、遺跡の存在が確認された。

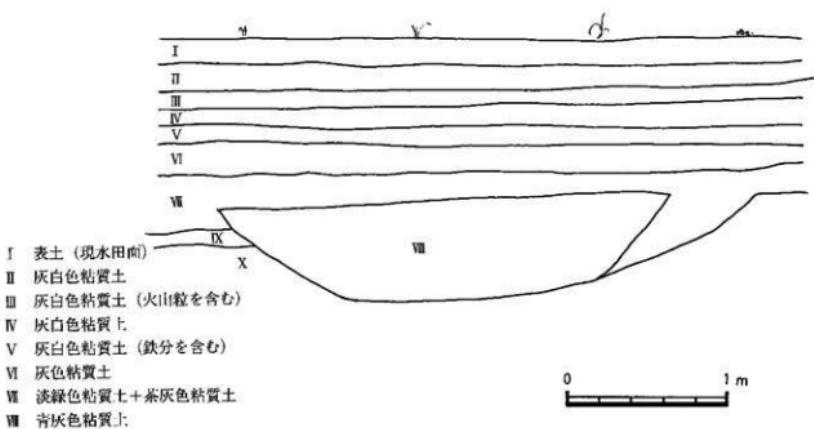
平成7年4月13日付けで、東宮土地区画整理組合より、埋蔵文化財の発掘届が提出された。これを受け、文化振興課では、宮崎市大字郡司分甲436~449番地及び宮崎市大字本郷南方4479~4495番地を調査対象地域として発掘調査を行うことになった。



第2図 調査区図



第3図 A区出土状況図



第4図 A区西壁セクション図

II. 調査の内容

1. 調査の概要

平田遺跡は、東宮土地区画整理事業の丘陵部造成工事の東側にある水田部を、調査したものである。丘陵と2つの独立丘陵の間に挟まれた部分を二区に分け東側をA区、西側をB区と設定した。また、北側の畠（民家）との境の部分をC区と設定した。特にC区については試掘調査の際に若干の土器を検出しただけであったため、確認の意味で掘り下げを行ったところ、表土より2m下がった段階で木の幹に当たった。そこで急遽調査区に組み入れたため調査面積、期間共に不十分なものとなってしまったことを、反省している。

A区からは溝状遺構と土器片、B区からも溝状遺構と土器片・不明鉄器、C区は、溝状遺構の中であり、自然木、土器が出土した。

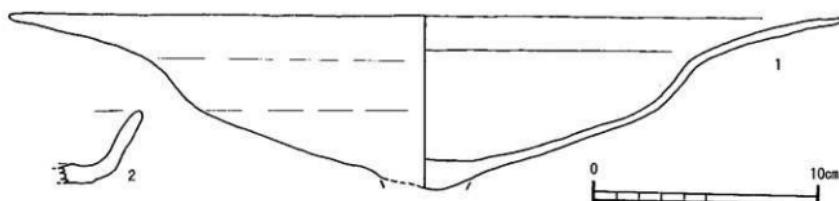
2. A区の調査

1) 遺構について（第3、4図）

A区では南西の角を横切る形で溝状遺構が検出された。幅1.5m、深さ60cmでB区の北東角をかすめているようである。溝に伴うと考えられる遺物は無く、磨滅の激しい土器片が数点出土した。

2) 遺物について（第5図）

遺物は調査区全体に点在した形で、その多くが磨滅し、細片化していたため実測出来たのは2点である。1は高杯で杯の中位に緩やかな段を持ちすぐに大きく外反するものであるが、磨滅がひどく器壁はかなり薄くなっている。2はヘラ切りの杯で器高3.5cm、外方へ伸びるものである。



第5図 A区出土遺物実測図

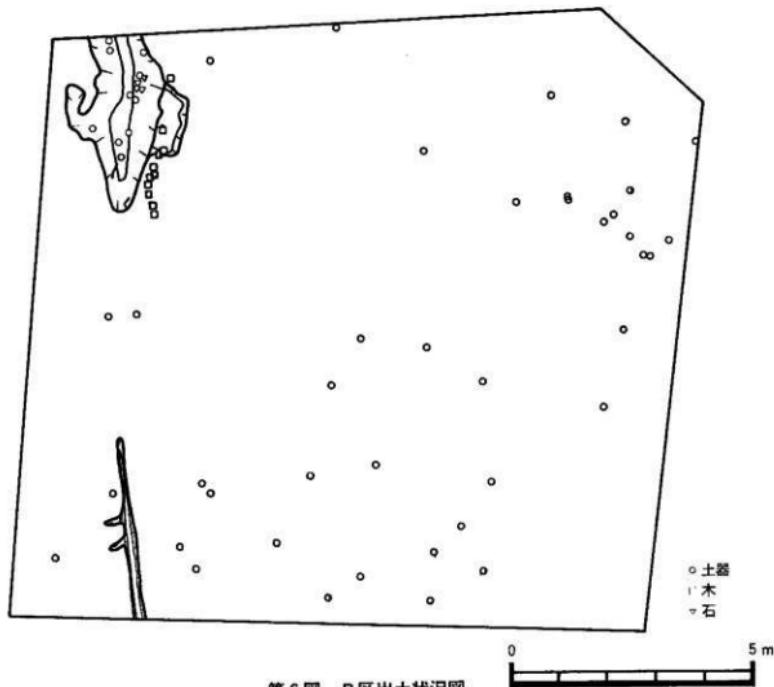
3. B区の調査

1) 遺構について（第6図）

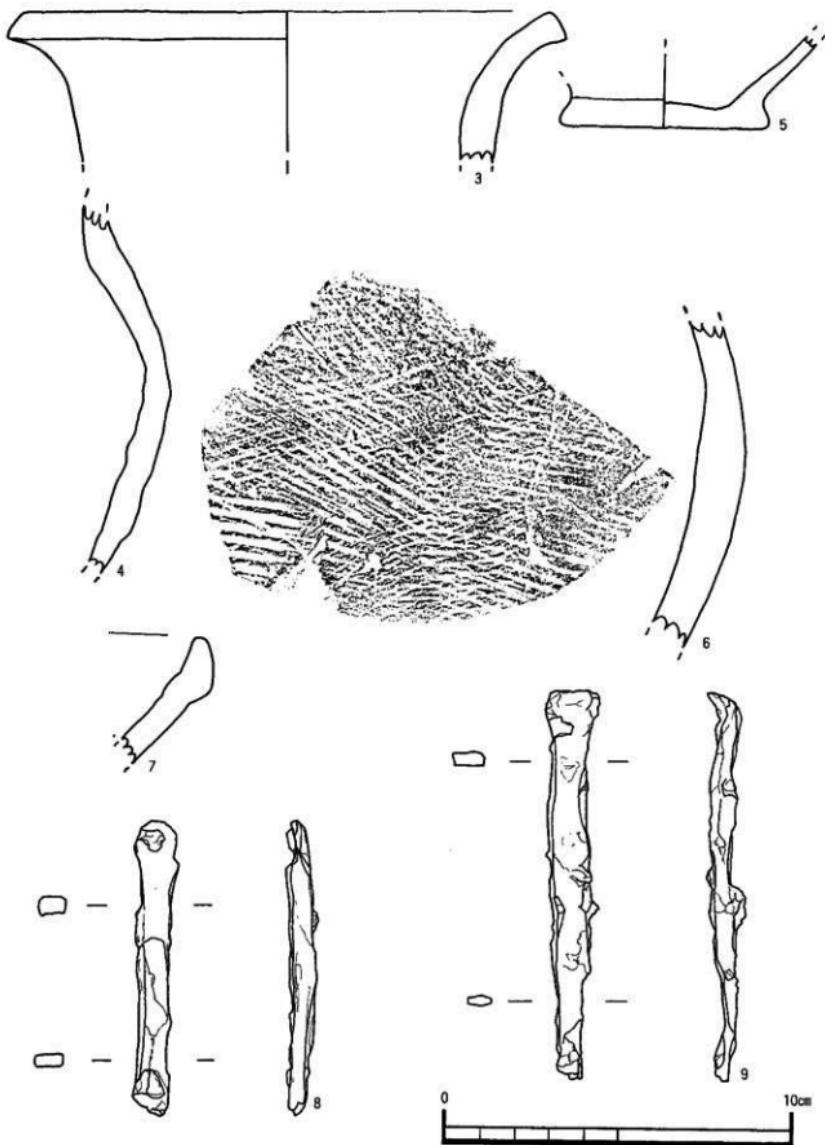
B区では、調査区の西側の壁より南北に走り、中央部が不明な溝状遺構が検出された。南側の部分は幅20cmで痕跡化しており、北側の部分は幅1m、深さ40cm程あり、東側に杭列が検出された。杭列は1本の直径が2cm程度で間隔が約20cm、11本がほぼ直線上に並んでいる。他に木片等が出土していないため柵とは断定出来ず、溝の流路、形態からすると水汲場の古いの様なもののはうが適當かと思われる。

2) 遺物について（第7図）

3は土師器の口径の広い壺の口縁部で端部は丸みを帯びている。4は土師器の胴部破片で調整はナデである。5は土師器の壺の底部で外面に木の葉の跡が残っている。6は内面ナデ、外面叩きの須恵質土器の胴部である。7は口縁部を三角形状に作る鉢で、魚住窯のものである。8、9は不明鉄器であり、刃部はスプーン状に湾曲し先端部を幅広にするものである。8は現存長8.5cm、幅8mm、刃端部を欠損している。9は現存長11.3cm、幅1cm、刃端部幅1.4cmを計る。



第6図 B区出土状況図



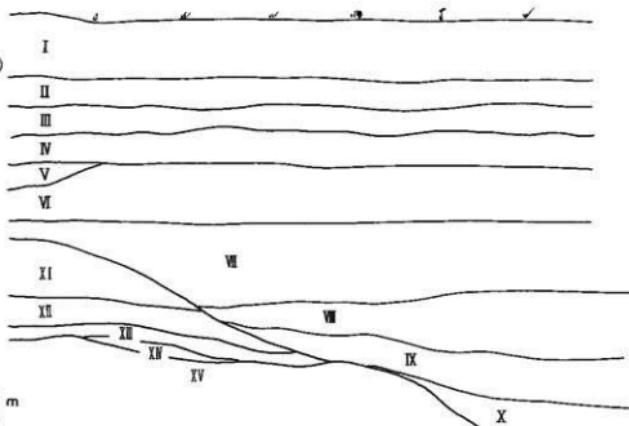
第7図 B区出土遺物実測図

4. C区の調査

1) 土層について (第8図)

C区の土層は上からI～VI層は水平に整地されており、水田利用の跡であろう。VI層から下には地山の粘土層を斜めに切る形で溝的な層が入ってきており。溝的な層は下層が木の葉等の堆積層と粘土層が薄く互層を成しており、水の流れが弱かったためであり、沼か自然流路の跡であると思われる。

- I 表土(現水田面)
- II 灰白色粘質土
- III 灰白色粘質土(鉄分を含む)
- IV 青灰色粘質土
- V 灰色粘質土
- VI 淡緑色粘質土
- VII 暗青灰色粘質土
- VIII 淡青灰色粘質砂
- IX 灰色粘質土
- X 自然物堆積
- XI 灰白色粘質砂
- XII 白色粘質土
- XIII 黒灰色粘質土
- XIV 白色粘質土
- XV 淡黒灰色粘質土



第8図 C区南壁セクション図

2) 遺構について (第9図)

C区は以前に述べたように、調査者の判断の誤りで対象面積が小さい上、砂を含んだ粘土の下を地下水が流れるため点的調査となってしまった。

遺構は特別にないが、自然木、先端加工の杭等が散らばり、土器がブロックで出土した。

長さ2.1m、幅70cmの丸太状の木が出土したが、加工痕は見られず単なる倒木と思われる。しかし、直径10cmの丸木や木の根、長さ30cmの石等と組合せると柵となる可能性も考えられる。

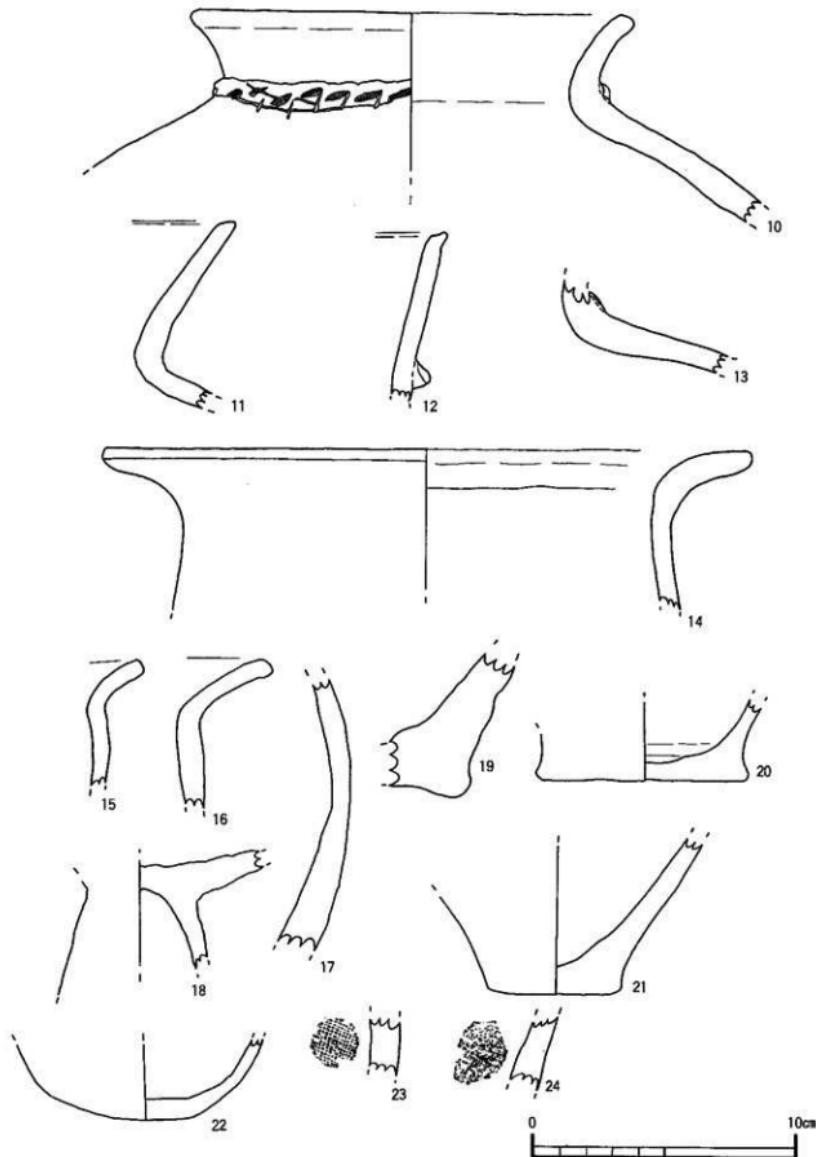
3) 遺物について (第10、11、12図)

C区の遺物としては土器と木器があげられる。土器は北側中央の巨木の東側(A)、西側(B)、西側中央部(C)、南西部(D)の4カ所に集中して出土している。Aでは10～12、21の壺が、Dでは壊、高台付き椀の大半と布痕土器が出土した点が特徴である。

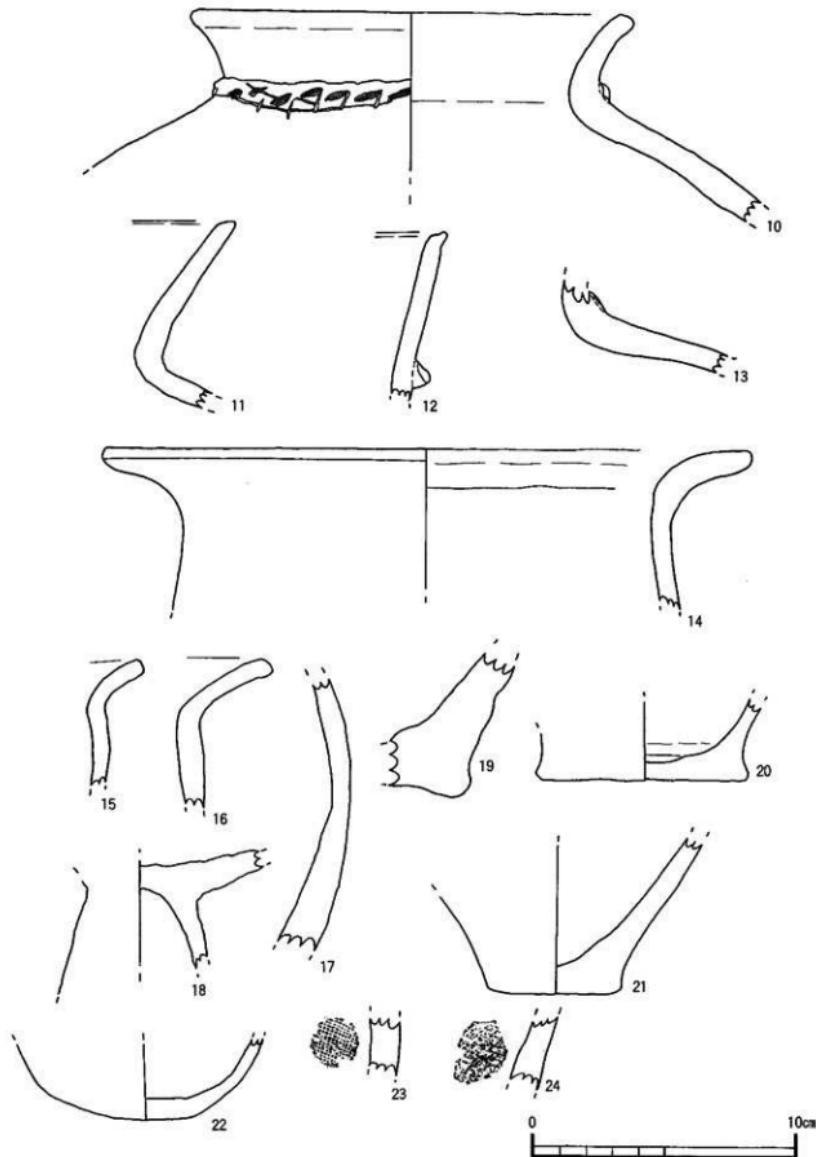
10は刻み目空帶を頸部に持ち、短く外反する口縁の壺である。刻み目はヘラ先を差し込んだものと布を卷いたものを押し込んだものの2種類がある。11は長く大きく外反する壺の口縁で



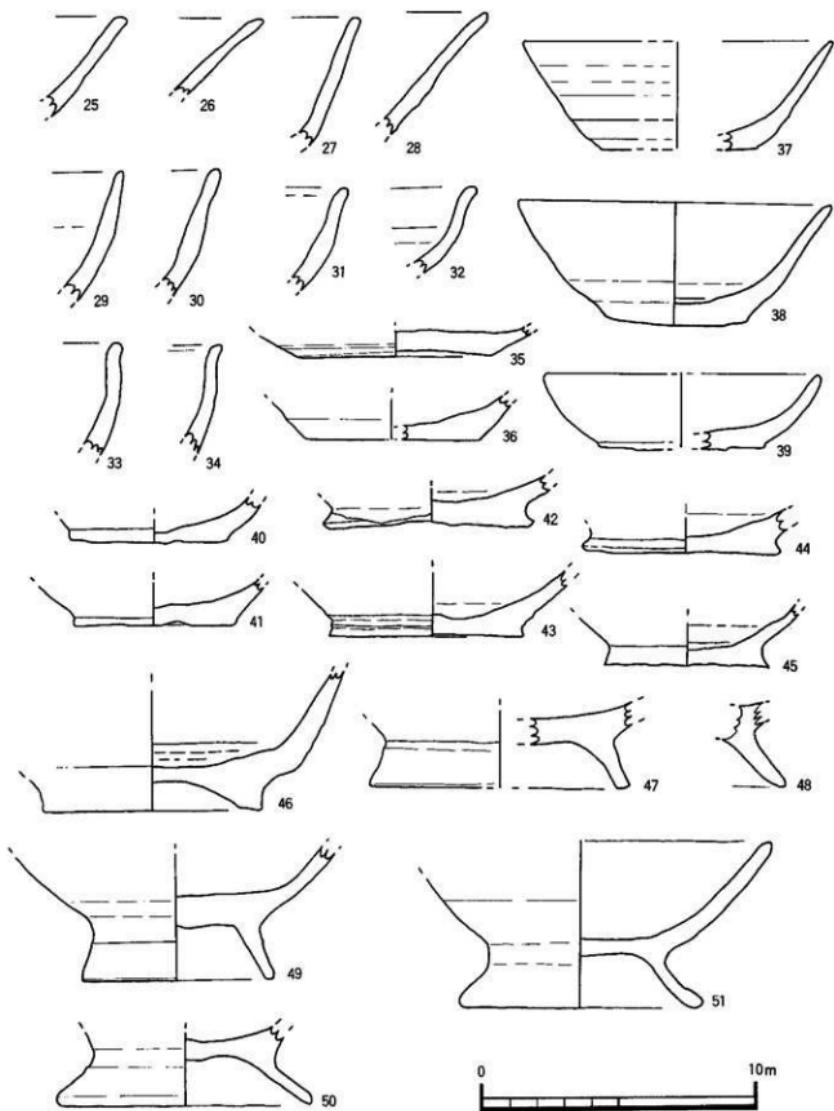
第9図 C区出土状況図



第10図 C区出土遺物実測図 1



第10図 C区出土遺物実測図 1



第11図 C区出土遺物実測図 2



第12図 C区出土遺物実測図 3

ある。12は直立気味に立ち上がる壺の口縁で刻み目突帯を持つ。13は壺の頸部で小さな刻み目突帯を持つ。14は壺の口縁部で直角気味に外に開き、器壁に比べ口縁をかなり肥厚させる。調整はナデである。15は短く外反する壺の口縁で調整はナデである。16は長く外反する口縁の端部を丸く仕上げ、胴中位に最大径がくる壺である。17は壺胴部で調整はナデである。18は高坏の脚部で調整はナデである。19は器壁の厚い壺の底部である。20は底部が外に張り出す壺の底部で調整はナデである。21は壺の底部で調整はナデである。22は楕の底部で内面はヘラナデ外面はナデである。23、24は布痕土器の細片で大きめの砂粒が非常に多い。25～51は堅緻な焼成でロクロ使用ヘラ切りの須恵質の坏及び楕である。25～28は直線的に外に開く体部である。29は緩やかに内彎し端部を細くする体部である。30～34は内彎しつつ端部を外反させる体部である。33、34は内面を特に丁寧にナデ、赤褐色を呈している。35、36は底部と体部の境が明瞭で無いものである。37、38は底部と体部の境は分かるが一体化的な整形を行っている。40、41は底部と体部の境は明瞭で、底部は短く立つ高台状となっている。42～45は体部との境から短く外に張り出す高台状の底部を持っている。46は厚く断面が台形状の高台を有するものである。47は長く外に開く高台で端部を平坦にするものである。48、49は長く外に開く高台の端部を丸くするものである。50は大きく外に開く高台で端部を丸くするものである。51は高台付き楕で体部は緩やかに外に開き器壁は一定で端部を丸くする。高台は大きく外に開き端部を肥厚させて丸くする。

52～55は1～3方向から切り落とすことで先端を尖らせるが、一面は地肌を残す杭である。どれも調整は雑で面を揃えることはしていない。52は直径5.8cm、全長62.7cm、調整面15.2cmである。53は直径9.9cm、全長45.3cm、調整面17.2cmである。54は直径3.4cm、全長31.2cm、調整面9.5cmである。55は直径5cm、全長22.8cm、調整面6.2cmである。

III. まとめ

平田遺跡では出土遺物から次の様なことが言えるであろう。

A区出土の高坏は坏の形態から弥生時代終末期のものと考えられる。

B区では木葉底の壺の底部が7世紀前半に、また、魚住窯の鉢は14世紀頃に比定されよう。

C区では刻み目突きの壺が6世紀前半、布痕土器及び壺は口縁形態から広く平安時代に比定される。坏と高台付椀であるがヘラ切りのみで糸切り底が見られないことが特徴であり、坏は宮崎学園都市遺跡の報告の中で10世紀前半の時期が当てられているものと大差がないと思われる。また、高台付椀については高台の開き、伸びから11世紀のものと考えている。

C区の状況から本遺跡の周辺が水田として利用されたのは沼が埋まつた後の時期で、それ以前は丘陵間の低湿地に小川が僅かに流れていたのであろう。

本遺跡は、従来あまり注意を払わなかった、丘陵間の低湿地の現地表面から2m下がつた所からでも遺構、遺物が出土するということを明らかにし、さらに周辺に弥生時代終末期から平安時代に至る住居（集落）が存在することを示唆しており、今後の東宮土地区画整理事業に伴う発掘調査の重要性を窺わせている。

最後になりましたが、発掘調査に当たり御協力頂きました東宮土地区画整理事組の方々、梅雨の中や猛暑の中に作業して頂いた皆様に感謝いたします。

付記

魚住窯に就いては、柳沢宮崎大学助教授に御教示頂いた。

参考文献

宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第1集～第4集 1984～1988 宮崎県教育委員会

源藤遺跡 1987 宮崎市教育委員会

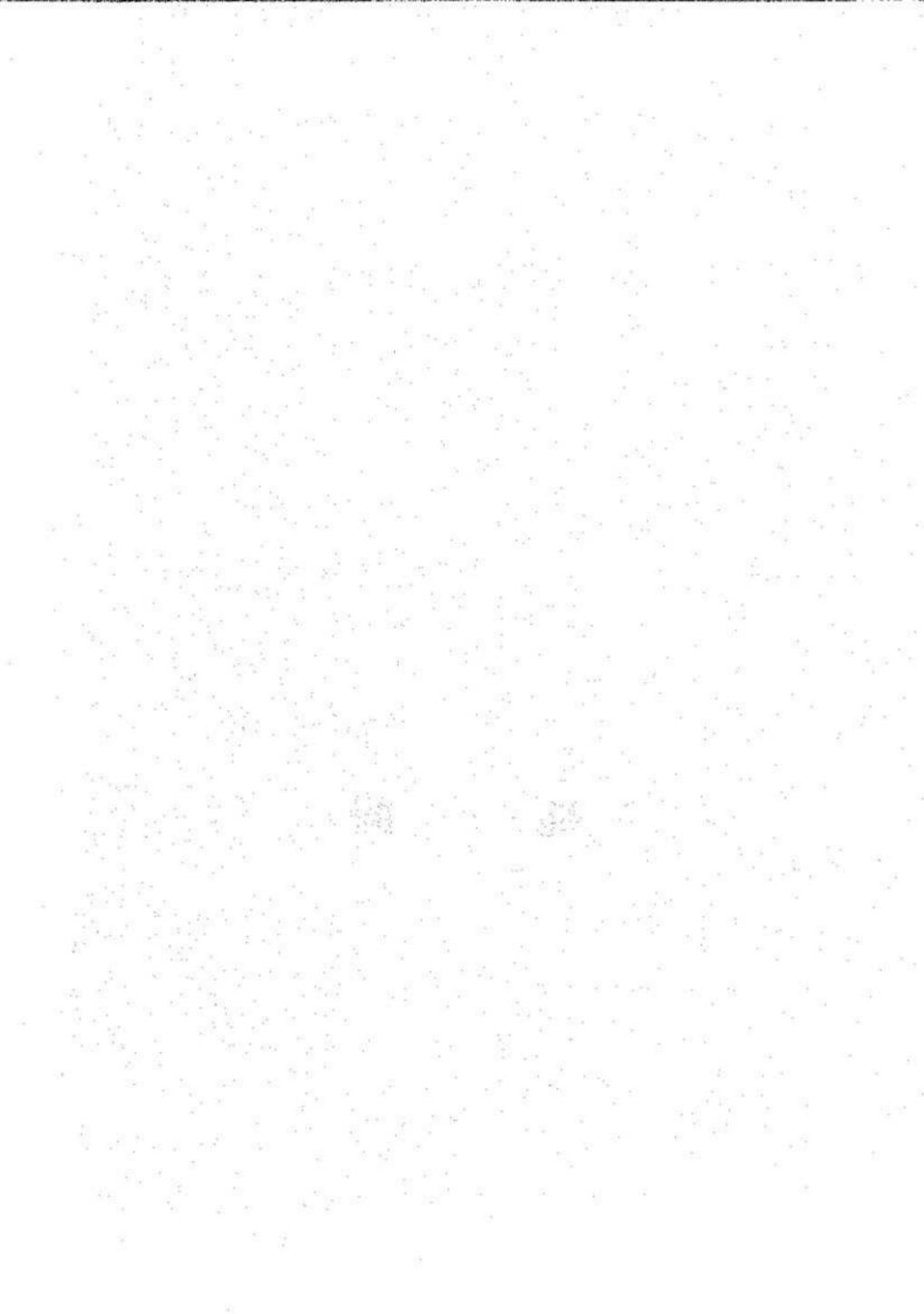
弥勒寺 宇佐弥勒寺旧境内発掘調査報告書 1989 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館

浄土江遺跡 1981 宮崎市教育委員会

浄土江遺跡Ⅱ 1993 宮崎市教育委員会

魚住古窯跡群 1983 兵庫県教育委員会

図 版



圖版1 A・B區全貌

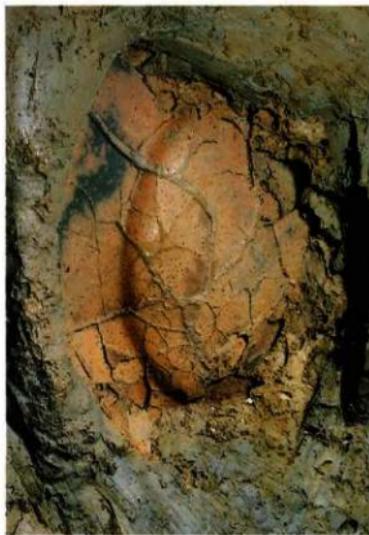




図版 4 A区西壁セクション



図版 5 調査風景



図版 2 A区土器出土状況



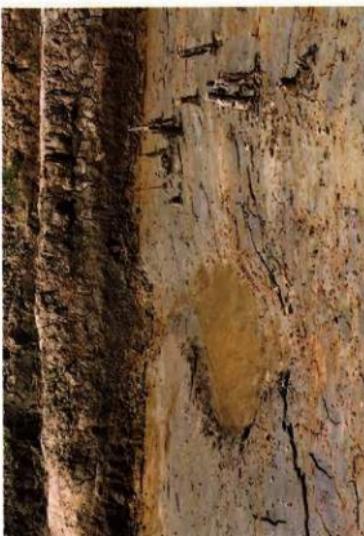
図版 3 A区漸伏遺構



圖版 8 B 区土器出土状况



圖版 9 B 区铁器出土状况



圖版 6 B 区铁器遗物



圖版 7 B 区土器出土状况

图版10 C区全景





图版13 C区木器出土状况



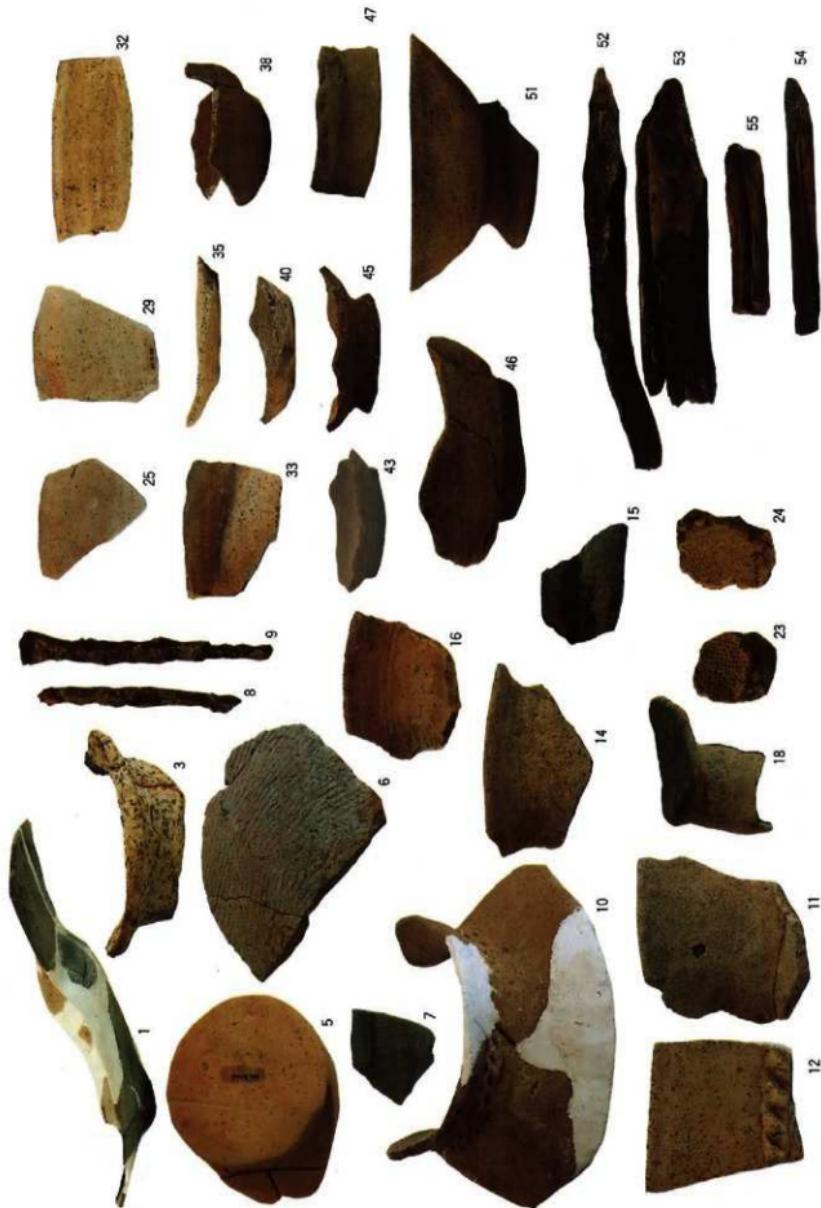
图版14 C区南壁セクション



图版11 C区遗物出土状况



图版12 C区土器出土状况



图版15 出土遗物

報告書抄録

ふりがな	ひらたいせき
書名	平田遺跡
副書名	宮崎広域都市計画事業東宮土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	
編集機関	宮崎市教育委員会
所在地	〒880 宮崎県宮崎市橋通一丁目1番1号 TEL 0985-25-2111
発行年月日	西暦 1996年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平田	宮崎県宮崎市大学 都司分字平田	45201		31°51'15"	131°26'06"	19950427～ 19950807	4,500	地区画 整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平田	散布地	弥生 江戸	溝 杭列	弥生土器 土師器 鉄器 木器	

平田遺跡

宮崎広域都市計画事業東宮土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書

平成8年3月

発行 宮崎市教育委員会